

明治期物売考

菊池真一

『明治大阪物売図彙』（和泉書院、平成十年）刊行後、調査し得た事柄を補足しておきたい。項目の配列は五十音順とする。

鮎売

「京都日出新聞」明治三十九年九月三日のコラム「労働者と収入（三）」に「鮎屋」があり（挿絵付き）、末尾に「されば血気盛りの者の鮎売などに出るは稀れにて大抵は五十を過ぎたるお爺さんの己が食ふだけあればとの鵝気なのが多し」とある。

粟餅売

幸田露伴に「餅の賦」（全集第三十二巻所収）がある。

紙屑屋

「京都日出新聞」明治三十九年九月五日のコラム「労働者と収入（五）」に「紙屑屋」がある（挿絵付き）ので、全文引用する。

紙屑屋に就ては曾て本紙上に「紙屑屋」と題し連載したる事あれば爰には単に資本と収入とを記さん、資本五円迄と車とを問屋にて借り一日買集めに廻る訳にて其収入に至ては其日の買出し高に因るなれば何程と明言する事は出来ねど古道具などに手を出す者は平均一日一円紙屑のみ専門に買ふ者は余程儲かる日にて三十銭を上らずとなり、而して何日頃が尤も買物の多き時なるやと聞くに第一は年末にて次は時候の変り目なり例令ば昨今の如き夏過ぎて秋に移る

の時など已に夏物の不用になりしを言葉巧みに買出せば古着古道具の類など多し古新聞紙、古反古などは年末に多しといふ

かんかち団粉や

「京都日出新聞」明治三十九年九月十八日のコラム「労働者と収入（十三）」に「団子屋」がある（挿絵付き）ので全文引用する。

団子屋は僅か五厘か一銭の小児対手の商売なれど其荷や売る方法には中々に意匠を凝し能く時の人氣に適る事を思付るて大路小路を売歩くなり図に示したるは稍々流行遅れの観あるも未だ都の端々には此種の団子屋を身受く今でこそ秋風歎の趣きを見ゆれ時局當時には此趣向非常に人氣に投じ至る所に歓迎され小学生徒などに取巻かれて一日七八十錢位は儲かりしも昨今にては三四十錢も難しく漸く其目を送るに過ぎずといふ戦争当時の残れる紀念の一として見るべし其他小さき立白を荷の上に置き杵音面白く団子を売歩るく鳥渡勇せ肌のお若いのもあり是は一日の儲け七八十錢を下らずとは団子屋とて馬鹿には出来ず

鴛亭金升『明治のおもかげ』（昭和二十八年）に、「玉兔」と題する次の一文がある。

明治中期までカンカチ団子と言ふ団子売りが子供を嬉しからせて居た。白と杵を担いで歩き、杵で白の縁をカンカチ／＼と聞える様に叩いて子供を寄せる。もろこし団子に蜜をかけて黄名粉をつけたもので美味しい団子だと大人も喜んだ。カンカチと言ふ名は杵の音ではなく景勝の転じたものらしい。江戸の普両国回向院の開帳から景勝団子が流行して『玉兔月影勝』と言ふ清元の踊りを芝居でやつてから今も舞踊会に玉うさぎは出るけれど、カンカチ団子は見られない。

汽車中の書物売

雑誌『文』二巻二号（明治二十二年）の雑誌の一つに「汽車内ノ貸本」あるが、これは外国の事情を紹介したものである。

「国民新聞」明治三十七年六月十五日に、「汽車内の行商取締」として、次のような記事がある。

京浜間基地の汽車内にて書冊類の押売りを為す者あり近來に至つて殊に甚だしく乗客に迷惑を及ぼす事少なからず其

筋にては今回断然鉄道營業法の規定に基き直に之れが退去を命じ若し再びする者あれば相当の処分を附する由依つて乗客は右の押売りに逃ひたる時は駅長又は乗務車掌に告げ其処置を求むべしと

『文芸倶楽部』第十二卷第十三号(明治三十九年十月)の「うきよ」欄に、木嬰生の「汽車売り」という文章がある。

▲汽車鳴り汽笛答へて汽車が静々と停車場を出発すると、間もなくスツと乗客の中に立上りたる一人の男、弁舌爽やかに陳べ立て乗客の注意を惹き、トゞズツクの大砲より数冊の書籍を取り出し、盛んに其効能を吹聴して売込むものがある。一寸其口真似をして見やうなら、

『エ、皆様、御披露申上げます。之は此度〇〇館発行の法律案内でムいます。此本一冊あれば戸籍のことやら、金銭貸貸上のことやら悉しくお分りになるのです。それに新版の女学雑誌に一時東京を荒した強盗何々の伝、坊ちゃんのお土産になる。〇〇画報、都合数冊揃へて代価は僅に十銭に割引して置きます。』など、面白可笑く囁し立てる。すると何しる数冊の雑誌が十銭とはすばらしい安直だ、汽車の中で読んでも好い、ナニ国の土産にしてもよい、と乗客は自己に財布を叩いてこれを買ふ。見る／＼十組や二十組を

売付ける内には次の停車場に着く。夫の男は、『有難うございました。』の一語を置土産にしてサツサと下車して仕舞ふのだ。今度は前の列車に乗込んで更に商ひをするのであらう。(下略)

「東京朝日新聞」明治四十一年一月十三日に「大道商売(三)」として「船中の絵本売」あり。

「東京朝日新聞」明治四十四年六月九日に「隅田川の汽船の中」と題するスケッチがある。そこでは、男が左手に数冊、右手に一冊、本を持って、客に売り付けているようでもある。

剪花売

「京都日出新聞」明治三十九年九月十四日のコラム「労働者と収入(十)」に「花売」がある(挿絵付き)ので、全文を掲げる。

花売に二種あり一は伏見辺に住みて己が作りしいろ／＼の花を朝な／＼剪りて市中に売る者と一ツは因幡薬師内の花市其他の花市より求め来りて売る者とありて風流なる花屋は前者にありて時に露の儘なるを売る時あり価は比較的安きも花の色後者程揃はずされば生花などに用ふる花は後

なる花屋に求むる憤ひありて実入の高も亦多けれど是等は
大抵自宅と連絡しある事とて鳥渡差別つき難けれど外出の
だけにて五六十銭は儲かる由、又己が作りし花を売て売子
となれば労働が金となる訳にて得たる金は悉皆儲けとなる
次第なるも此種の花屋は仏花を売るが多きゆゑ儲け高又七
八十銭に止まりて日々売りに出るといふ運びとならず、彼
の白川の花売女は其花売女の小遣銭を儲ければ足れるにて
此労働者の部に入らず

ゲンコツ豆売

「大阪朝日新聞」明治二十四年十一月二十日に、「道修町の細
工人形」として、次のようにある。

明廿一日より三日の間東区道修町兼祖神社の祭礼(神農祭)
につき例の如くいろ／＼の作り物をするよしにて其人形は
加藤清正の虎狩、松右衛門の逆櫓、太功記十段目、朝妻船、
辻占売ゲンコツ、へら／＼坊主、三番叟等にて活花もいろ
／＼出来るよし

これより「ゲンコツ豆」が明治二十四年の新風俗であったこと
が伺える。

孝行糖売

薄田泣童『泣童小品』(明治四十二年刊)の「大寒の記」に、
さる古老の手書を借り来りて、維新前に旧都に行はれたる
民謡、物の売声など書きとる。
として列挙する中に、

『こことや／＼。こことの正体は、梗の米の寒晒し。匂は
丁子胡麻や千山椒、麻の実と陳皮、榧と銀杏。猫ろん鼠食
べて皆々美味かる。』(餅売の行商の唱へ歩きしもの)

とある。餅売が孝行糖売の文句を流用したものであろう。ある
いは、「餅売」というのは、孝行糖売の間違いも知れない。

聖書売

桜田文吾「貧天地儼寒窟探検記」(『日本』明治二十三・二十
四年掲載)に、次の件がある。

飴売りは忠実だち、先生ドーダ事は相談によるものなり。
戴盟の飴屋その本元は浅草にあり、本は警部まで勤めし人
の女のために過ちて今の商売となりておらるるが日に三兩
ほどの商いあり。我友達にも二、三人その世話蒙るがおり

候。この身なんどはかかる醜男なれば抛却られて候えど、

先生は体が好ければ採用せらるること大丈夫なり、先生
ドーダやる気があらば骨折て見候わんかという。側より肩
輿屋の翁異議を挿入し、お前さんの様子を見れば耶穌の本
売りなど相当わしからん、鮎屋にはちと惜しき物なりとい
えば、鮎売りはこれを駁し、耶穌などに這入らんより鮎屋
こそ寛かな勝りたれと論ず。(岩波文庫『明治東京下層生
活誌』による)

ぜんざい屋

「大阪朝日新聞」明治十五年三月十五日の記事に寡婦が善哉
売をする次のような記述があり、挿絵も付いている。

残りし衣類杯を売代なし其金にて古びたる善哉の荷を購ひ
来りおまさは毎夜其荷を担ぎ菊蔵を便りに夜露を犯し善哉
召れずや正月屋善哉々と声のかるゝまで荷ひ歩行ど母子
が口を凌ぐ程の利益はあらず

辻占豆

「読売新聞」明治八年八月二十九日に、

○私が此間西洋の辻占菓子を買ひ開いて見ましたが横文字
にて分らぬ故翻訳して貰ましたら「わたしのこゝろが、あ
なたのこゝろに、叶ひましたら、母さんへ咄して見ましや
う」とありましたが西洋の娘たちは常々母が能教へます故
色事などにも自分の気まゝにはしませぬことゝみえて能こ
とであります付ては我國の辻占煎餅などには甚しい色こと
のことが書てありますし又流行唄などにも淫奔ことを無暗
に作つてうたはせますが大きに娘たちの風俗に関り誠に宜
しからぬこと故其筋の御役所より御差止になりたく又親々
は娘御達に此様なものは見せも聞せもせぬやうになされた
いといふ者は 浅草沓花翁
とある。

「大阪朝日新聞」明治二十七年三月十三日に、

●千日前の乞食 南地千日前には売淫女多く其境界の大
略は前号に記載したるが尚同所には諸国より入込みて乞食
を渡世同様にして居る者頗る多く其数凡そ百名に近きよし
されど此等の者は公然と乞食とは名乗らず表面ばかりの申

訳に紙屑拾、烟管の仕替、磨砂壳、遊芸稼（祭文語り、阿房陀羅坊主等）車の挽子、辻占売等の鑑札を受けて居れど其実は皆物貰にて一人の頭ありて其指揮を受け諸方に出て物を貰うて帰ることなるが其貰高の最も多きは廿錢ぐらゐ少きは四五錢にて貰ひの多きは賞め少きは叱り又それ〳〵組合ありて病氣のときなどは互に助け合ひ情交頗る親密なりといふ

とある。「大阪朝日新聞」明治二十八年十二月十三日の広告に、

かい良辻うらせんべい 一枚巻厘

右今回新製発売仕候品は御子達様御婦人様方の御たのしみ
のせんべいなり

大阪市北区しよめばし 近藤本店

天満天神戎門西手 近藤支店

とある。

「大阪朝日新聞」明治三十六年八月十二日に「夜の公園」と題する次の文章がある。

行水にザツと汗を流して、扇子の他、物持たぬ袂は軽く歩を移して、中之島公園にさしかゝれば、樹の蔭、長床凡の後よりチヨコ〳〵と走り出づる小さき姿あり。

不意なれば、犬ころがそばへ付きしかと、俯向いて視るに児童なり、浴衣着たる合線頭の女の児童なり、品格は左程にいやしからず、色も白し、手に数十枚の紙片を持ち、哀れなる声にて「辻占買ふとくなはれ、旦那様辻占を」といそがしくいふ、我に辻占の要なけれど、二三葉買うてやり、お前は幾歳と問へば十歳と答ふ、次に、家は何処、親はあるかと問ふに、少女は眼を円くしながら、私は北野からまゐります、父は無し母と六歳の弟一人あり、毎夜母諸共〳〵に来て十二時頃に還るに十錢位の所得あり、昼間は又自分一人留守番して母のみ辻占売に行く由を答ふ、いと寛束なし、かうして頼めば大概買うて呉れるかと更に問へば「イ、工頭をたたきやはる人がおます」と涙含む、咄、かゝる動物もありけり、いかに付き纏はるゝがうるさしとて、罪も無き者をたゞくべきか、それ程の無情にて涼む面見たし、その冷やかさにて氷飲む面見たし、中流か、下層か、紳士か、労働者か、紳士はまさかに、されど世に、紳士と称する者あり、大方標的に成らず、髭を生し美服を着て大手を振る、一寸えらきやうなれど、心のさもしさは乞食にも劣れるが少からず、この辻占売をたゞく輩、もしやその種類かと想像する間に、少女の姿は掻き消されたり。

我も亦彼方へ去るに、又忽ち黒きものチヨコ／＼と走り寄る、今度は二人、姉妹らし、以前のよりは色黒く、着物も汚く褻れたり「辻占買ふとくはなはれ、辻占、辻占」声細く慄へて夏なほ寒し、殊に妹と見ゆるは頑是なく、姉に手を引かれながら眠気なり、勿論母など陰に付き添へるなるべし、あはれこの小さき者の境遇よ。

傍には媒母車に揺られて微笑む幼児あり、いかなる運命や持つらん、又五人六人づゝ打群れて他の児童等遊べり、雀の如く囀り、兎の如く走りつゝ、楽しき想ひやるべし、又奥様あり、下女に後より団扇で煽がれつゝ行く。(下略)

「東京朝日新聞」明治三十七年一月十三日に次の記事がある。

●老の辻占(泥坊だよ) 霜夜に年寄の声細く『花のたより淡路島通ふ千鳥の恋の辻占』と本所区内を売歩く五十二三の親父あり若い者なら卒知らず提灯の絵の花もなきヨボ／＼の辻占は『色気がないよ』と評したけれど慈善心ある人々は『かあいさうだねへ』とか『思ひやられます』とか涙ぐんで煎餅を買ふので商売は『大当りだよ』と当人喜んで居るは何よりなれど折々界限の子供に椰楡ひ我売物の辻占を大擾みに与へるは何うやら不審の振舞故其筋の人も目を離さず『ほんにお前はをかしな素振たゞして遣りたい事

がある』と頻に注意せし如一夜右の親父が十数個の垂鉛製バケツを提げ急ぎ行く体を見掛けしゆゑ『怪しいねへ』と呼とゞめ『あかしてお呉れ』と訊問すると『大凶、望事かなはず、盗物あらはる』といふ様な訳にて胡乱な言葉を出せしかば『ちよいとお出で』と拘引し猶嚴重に取調べたるに此辻占売は茨城県猿島郡古河町平民小西熊吉といふ者にて辻占入煎餅は度々松倉町の菓子屋平泉にて盗み又バケツも諸所にて引攫ひ是を飲食店へ持込んで酒代にかへる次第まで明細に白状したりとは『あきれたよ』

辻洋食

『明治大阪物売図彙』に「大阪独特の商売であろうか。」と書いたが、東京にもあった。「東京朝日新聞」明治四十一年二月二十四日に「屋台店廻り」と題する次の文章がある。

近來西洋一品料理の屋台店の殖えた事は実に驚く許りで、繁華な市街の横町で白金巾を引廻した西洋料理の屋台見世の影の見える事はない、是がまた相応に繁昌する、客の種類は商家の手代、丁稚、労働者、書生、下級会社員等で偶には近傍から皿を以て買ひに来るのもあるさうだ、

△夫れで彼等が第一の得意とするは商家の小僧さん達で、

小僧は労働が劇しいから夕食をしたゝか詰込んで一時間も経つとケツソリ腹をへらすので、風呂の戻り乃至主用の帰りに此屋台店へ頭を突込でバクツクので、大店の小僧などになると平素主家が何百円何千円と大きな取引を目馴れ耳馴れして居るので、氣位が高くなつて居るから五銭や十銭の金は何とも思はず七銭のピフテキを三四皿と七銭のライスカレーを二皿位を夷げて五十銭銀貨を抛り出し手行くから此連中の来るのを書入にして居る。

△ソコで一寸一品料理の値段を紹介せう、シチウ四銭、カツレツ、コロツケー、オムレツ、フライ、ライスカレー、ビーフテキの類各七銭、コールビーフ九銭、ハヤシビーフ十銭、正宗、沢の鶴一合燻中味九銭、麦酒小中味十五銭といふ安売だから、山盛のシチウ一皿で正宗一本を倒してライスカレーを食つて勘定と云ふと僅かに二十銭だ。

△二十銭と云へば普通料理一品の値段だ何と安い物でないか、尤も安いには安いだけの理由がある、肉類は大抵ソツプの出し殻たるは云ふまでもない例の桜肉も無論用ひられて居るが、ソースや辛子を添へてお刺に珈琲まで服まして帰す、素人眼から見ると何如して引合ふかと怪しまれるが、

爰に最う一ツ安い理由がある。

△其理由といふのは、西洋食料品商の手代などがちよい／＼立食に来て亭主と顔馴染になると、何々を安くするが買とかないか、何々は幾割引くとかと云つて抜荷を売付けに来る、此方は渡りに船だ足下を見て値切倒して安く仕入れるといふ便利があるので彼等は大に助かつて居るさうだ、何の道にも抜目はない。

△目貫の場所に出て居る亭主の云ふには、増税で是から先は売り難いだらうと思ひます、ナニ利益ですか先づ三割くらの商法をして居ては何にもなりません、毎晩の売上げが十円以上なくつては食て行かれませんか、夏と冬ですか、左様夏の方が売口は可いのですが夜が短かいし、冬は夜が長いけど寒いから立つ人が夏のやうにはありませんから平均すれば同じやうなものです云々。

△シテ見ると十円商法して半夜に三円になる、一ヶ月九十円の純益があると聞いている屋台店の殖えるのも無理はない。

豆腐屋

「京都市日出新聞」明治三十九年九月七日の「労働者と収入(二六)」

というコラムに「豆腐屋の売子」と題して、次の文章がある（挿絵付き）。

成田 飴

絵の上部は東京の豆腐屋、下のが当地の豆腐売なるはいふ迄もなし、此豆腐売の中にも豆腐屋の主人自から売に出ると売子を何人も置ける家との別あり、主人が直接に出る分は此所に要なし、売子は概ね北国より来り家内にあつては豆腐製造の手伝をなし午前は十時頃より午後は三時より売りに出るが売りに行く場所は大抵決り居れり時に平生の得意場所以外へ売りに行事あるも効なしといふ、主家で食つて一ヶ月二円位の小遣ひを貰ふが上の部にて売りに出れば

二割の口銭を貰ふを定めとする由其の売上高は先づ一月平均二十五六円あるを余程商売巧手の者といふが四季共此の調子といふ訳にゆかず、書入れ日は月末に豆腐粕、私祭前及び年末に煮菜用として売れる時なりといふ

鍋焼うどん

「東京朝日新聞」明治三十七年十二月七日に「鍋焼うどん」と題するスケッチが掲載されている。

『明治大阪販売図彙』では、「砂糖丹切飴（成田屋）について、これが「成田飴」と同じものかどうかは判らない」と書いたが、貞広の画の「成田飴」の上の方にある文字が「丹切あめ」と読めそうなことに気付いた。恐らく、同じものであろう。

鉄とぎ

「京都日出新聞」明治三十九年九月十六日の「労働者と収入（十一）」というコラムに「研ぎ屋」と題して、次の文章が掲載されている（挿絵付き）。

以前の研屋は道具を入れたる箱を肩に担ぎ或は天秤棒にて是を担ひて大路小路を「剪刀、剃刀トギ」と呼びあるきたるが羅字の仕替が蒸汽を応用する程の世となりたれば研屋も又た小さき車を曳く事となりぬ、研屋の道具だけみては車の上の寂しきより小刀、庖刀其他の金物類を列べて販売をも兼ねる従つて其収入も増加し多き日は一日に三十銭にもなれど少き日は十五六銭の時もあり平均一日の収益四十

錢位になるといふ雨天の多き月など殊に困難なり而して以前の研屋は大抵渡り者が多く木賃に宿りて日本全国を跨にかけしが近頃車を曳いて来るは重に土地に住む者なりとぞ

瓢箪山辻占

「大阪朝日新聞」明治十五年二月十日の記事の中に、河内瓢箪山辻占屋でございと毎夜南地の花街を駆歩行き日々の渡世にして居る難波村新金刀毘羅神社前の井口利助（五十八）といふ老爺は老て益々壮なるか（以下省略）という一節がある。

「大阪朝日新聞」明治十八年五月二十三日に「瓢箪山桶荷の賈物」と題する次の記事がある。

名高き河内瓢箪山桶荷神社の支社が此程より西成郡九条村茨住吉神社の近傍に出来たりとの評判世上に高く聞えて之に参詣するもの頗る多く為めに河内の本社に影響するほどなりし然るに本社にては元より支社などを置きしことのみなきを以て其実際を取調んと一昨日懇々来阪し直に九条村に至り見るに果して立派に飾付たる一社あり依て金十銭を出し他人の手を以て試にお供を為せし如瓢箪山社務所と記

したる領収証を出したれば愈々賈物なりとの証拠を得昨日其筋へ告訴なしたりといふ

「大阪朝日新聞」明治三十年三月二十六日に「辻うら売」と題する次の記事が掲載されている。

河内瓢箪山辻うらでございと愛らしき声張上げて呼ぶ後より運氣縁談待人失物旅立方角恋の辻占と婀娜気なき声に和け行くは十九と十五の娘なり宵から廻る新町の廓には調子も合ぬ三味聞て撥を持つ手に二円三円握らせる客はあれど高が五厘一銭の辻占見向て呉れる人もなければ提燈の火に姉妹が手を温めしよんぼり佇立む扇屋の門へ東の方より来かゝりたる廿二三の婦人オ、辻占屋はん此処に居てか辻占買うて上げましょといふに姉妹嬉しくすり寄て五厘のだから一銭かのにしましよかと笑顔に見上る顔を見下し何ばあるか知らぬけども一枚五厘に買うて進ぜる悉皆出しなはれと二十銭銀貨投出され姉妹は氣もいそ／＼底を払うて辻占を渡し売溜の小銭かき攫うて十六銭の過剰を与へてお有難うの百遍も述べたるのち喜び勇んで廓を出て千日前を新金比羅まで来りしは一昨夜の十二時過なり妹は其処の魚屋に鮎の骨盛りたるを見て姉はん彼の鮎何ばや知らぬが爺さんに買うて上げたら少しは身体力にならうといへばオ、宜

う気が付た今夜は思はぬ商ひした依て二銭だけなと買うて
上げましよと一盛二銭の鮎の骨買ひ受けて二十銭を払ひ渡
すに魚屋の爺目を剥て十八銭と其の骨とを騙り取らうと為
くさつても其手に乗る爺ぢやないあのこ、な偽金使ひめと
銀貨を投出し打擲する下を潜つて言訳してもいつかな背ぬ
一敵に姉妹はワつと泣出せしが折よく見知り人の通りかゝ
つて身の明りだけは立たるものゝ立ぬは銀貨の始末なり
(下略)

磨砂壳

「大阪朝日新聞」明治二十七年三月十三日掲載の「千日前の
乞食」の中に「磨砂壳」あり。「辻占豆」の頁参照。

焼薯屋

「読売新聞」明治八年九月十五日に、
○今年は薩摩芋が大当りにて焼芋やの殖こと諾方へ沢山出
来まして「○やき」十三里または「九里半」塩やき「胡麻
やき」てツか焼と銘々に工夫をして釜の支度や行燈のはり

替へ筆太に書たてる中に本所魚沢町の引こんだ家の行燈に
は「○焼六里半」と書て有ますが東京は物見高い土地ゆゑ
に女中衆は猶さら眼を付て十三里なら九里四里うまいとい
ふこと十一里は川越といふこと九里半は九里をこすといふ
こと「十里」と有れば五里五里いも五十四里なら六九里や
けたのだが「六里半」といふのは何の訳で有ろう大かた女
房がお世辞が無いから六里(むつつり)すぎることでも有
ろうと虚ではない本所の人のほなし
とある。

焼栗や

「京都日出新聞」明治三十九年九月二十八日の「労働者と収
入(十五)」というコラムに「焼栗屋」と題する次の文章があ
る。

焼栗屋は年中夕刻より一種の節ある「栗や栗や」との呼声
高く各遊郭を売歩き居る意気な若者もあり看板の行燈には
夜泣のそのの如く役者の名などを記せり、名は焼栗屋とい
ふも銀杏も持ち居りて車の上にて焼きつゝ売るなり、子供
の相人ならぬだけ五銭より以下の買人はなく大抵十銭二十

錢を撒きちらす金で買ふ事なれば安い高いは無論いはず随分と面白さうな商売にて時に浮気な娼妓などの惚れるとか腫れるとか、其一日の収入はと聞けば高上げの日に因て相逢あるは勿論にて五十錢位の時もあるれば二円五六十錢の時もありて昨今の如き新栗の顔を出し始める頃が一番多く売れる由にて平均一日の純益金六七十錢以上なりと聞く

らうしかへ

「大阪朝日新聞」明治二十七年三月十三日掲載の「千日前の乞食」の中に「烟管(らを)の仕替」あり。「辻占豆」の頁参照。

「京都日出新聞」明治三十九年九月十日の「労働者と収入(七)」というコラムに「羅芋の仕替」という題で、次の文章が掲載されている(挿絵付き)。

羅芋の仕替屋といへば薄汚い衣物を纏ひし爺か婆かに定つて一日「羅芋仕かへ」と声を濁らして歩いても十錢前後儲かるのが関の山なりしに世の進むにつれて此の仕事にさへ蒸気を使用する事となりしは大した進歩とやいふべき、随て以前の如く襦袢を纏ひし者なくなりたれど尚昔の名残を

見受けぬにあらず中には子供を玉に使ひて「今日は親の命日ゆゑ長いのも短かいのも一錢」と声高に呼び歩き襦袢を装うて儲けを多くせんと巧むもあり而して所謂機械応用の分は一日三四十錢の儲けある由にて風俗が変れば儲けの多くなりしも不思議なり彼等が第一に仕事の多き場所は中京にて是は白鼠殿が脂下つて煙草に暇を潰す結果なるべく次は遊郭にて場末となるに従ひ反比例に仕事が増えるといふ事なり